

新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信

NOM



第8号

1997.4

平成8年度 新 収 蔵 品

《世界の美術》

油 彩

- ◆ジョルジュ・ルオー 《晩秋 No.3》
1943～52年 油彩、キャンバス



この作品は、1949年から1956年にかけて制作された「聖書の風景」の中の一枚で、ルオーの娘イザベル・ルオーの家の書斎に飾られていたものです。ルオーの特色が随所に見られる大作です。

彫 刻

- ◆フェルナンド・ボテロ 《母性》
1989年 ブロンズ



1992年、ボテロはバリで大型彫刻の野外展示を行ないました。この作品はそれに先立って作られたもので、彼の最近の関心を示すものです。館外に設置するため、いつでも見ることができます。

中国画

- ◆晏小翔 《秋牧圖》
1994年 絹本軸装

版 画

- ◆エミール・オルリック
《日本の版画家》
1900～01年 多色木版画



- ◆ゴヤ
《カプリチオス》よりNo.4、21
1797～98年 銅版画

《日本の美術》

日本画

- ◆奥村土牛 《少女図》
1926年 絹本額装



奥村土牛の初期の作品です。少女が一人描かれているこの作品は、美人画ではなく、かといって風俗画ともいえません。少女の日常的な姿に無垢な清らかさを表現した作品です。

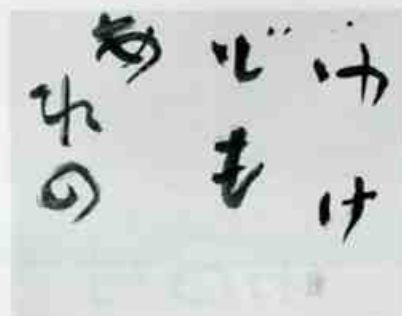
写 真

- ◆濱谷浩 《學藝諸家》30点
モノクローム・プリント

書

- ◆江口草玄
《野ばら》 1950年
《作品No.6》 1955年
《天心》 1964年
《不動明王》 1964年
《一機一瞬》 1966年
《はかなさは》 1975年
《一期は夢よ》 1984年
《行けども荒野》 1984年
《夢為胡蝶》 1996年

昨年秋の展覧会を機として収集したものです。江口草玄の各時代の代表的作品を網羅しています。



《新潟の美術》

日本画

- ◆三浦文治 《佐渡のイカ干し》
1938年 紙本額装



- ◆三浦文治
《越前国勝山町左義長祭り》
制作年不詳 卷子

洋 画

- ◆中澤茂 《グアテマラの女たち》
1969年 油彩、キャンバス
- ◆中澤茂 《老婆の高笑い》
1968年 油彩、キャンバス
- ◆安宅安五郎
《野尻湖外人別荘地》他8点

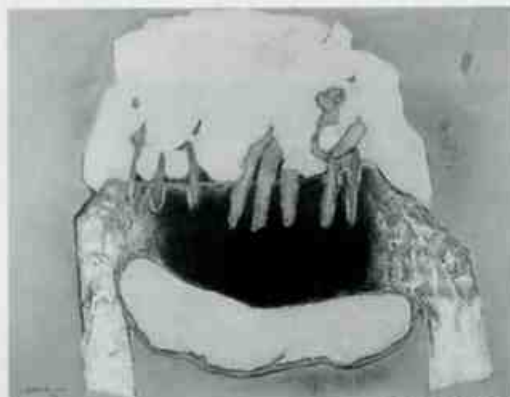
ブラジルの陽光、色彩の祭典。マナブ間部展 4月10日(木)～4月22日(火)

会場新潟大和（7階美術特別会場）

マナブ間部は1924年熊本県に生まれ、10歳の時に一家をあげてブラジルに移住しました。20代前半から本格的に絵を描きはじめ、1950年の国立美術展での初入選以来次々と受賞を重ね、1959年には35歳で第5回サンパウロ・ビエンナーレ展国内大賞など4つの最高賞を受賞し、一挙にブラジルを代表する国際的な画家として脚光を浴びました。1960年にはブラジルに帰化し、現在もっとも著名な日系人画家として活躍を続けています。

彼は初期には風景や静物を写実的に描いていますが、やがて画面を構成しようという意識が強くなり、さらに半具象的な叙情的作品を経て1958年以降は完全な抽象作品へと移行します。以来彼は鮮烈でかつ洗練された色彩と感受性による抽象絵画を描き続けています。

1993年日本経済新聞で連載された「私の履歴書」の中で、間部は幼い頃の思い出を語っていますが、そこにはたくさんの色彩が登場します。父親に突然ブラジル行きを宣告され「コーヒーの実をちぎって暮らすんだ」と言われた時は「赤いコーヒーの実のイメージがフワッとわいた」し、移民船ラプラタ丸で日本を離れる時に見た夕日は、「日本の赤。ブラジルの明るい赤とは違う日本の色」でした。コーヒー園の地主の耕地内の牧場では「赤、青、黄色の原色が鮮やかなこの鳥（オウム）が、黄色いゴイヤバの実の皮を破って真っ赤な果肉をついばんで」います。10月には「コーヒーの木は一斉に白い花をつける。コーヒー園はふだんは緑の樹海といった趣だが、花をつけるとこれが“白い海”に変身」します。



（仮題名）1993年

マナブ間部の芸術、特に彼の鮮烈な色彩感は、10歳までの日本での生活や彼の生来の明るさに加え、多感な少年期から青年期にかけて体験したブラジルの自然の中でコロノ（小作）生活を土壌として生れてきたことは、その作品を見れば十分納得できます。自身も「私の履歴書」の中で「電気もなく、朝の光の明るさと暖かさを実感できるコーヒー園の暮らし。その自然が私の人格形成、画家としての資質に与えた影響は計り知れない。」と回想しています。

間部の抽象作品からはなかなか具体的なイメージをつかむことはできません。しかし、その色彩やマチエールからは、ブラジルに生きた日系二世の間部自身を理屈抜きに感じ取ることができるでしょう。

（美術学芸員 宮下東子）

「1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開」展

9月13日(土)～10月12日(日)

1900年(明治33)は、東京で日本絵画協会と日本美術院の連合絵画共進会が回を重ねて開かれたり、パリでは巴里万国博覧会が開催されました。また新潟では新潟県会議事堂を会場にして、日本美術院の巡回展として新潟絵画展覧会が行なわれ、横山大観・菱田春草・橋本雅邦などの作品が約600点出品されました。

明治維新以後、新政府が積極的に西洋文化の導入に努めた結果、フェノロサの来日、京都における円山四条派の流れをくむ画家たちの台頭、東京美術学校の開校など



下村鶴山（元禄美人）明治32年（1899）石水博物館蔵

により、江戸時代に隆盛を誇った狩野派や土佐派は衰退し、一時盛んになった南画も、次第に新しい絵画の創造の波に飲み込まれていきました。

このような時代背景のなかで1898年には日本美術院が開院し、旧来の日本画と新しい日本画がせめぎあいがら19世紀から20世紀へと移行しました。

本展覧会は「巴里万国博覧会」「日本美術協会・日本美術院連合絵画共進会」「新潟絵画展覧会」の三部構成で、明治後期における日本画に反映された時代の様相を浮き彫りにするとともに、地方で開催された展覧会の資料を検証することにより、近代日本画が形成されていく過程での一断面を明らかにしようとするものです。

（普及係長 横山秀樹）

国立西洋美術館展 愛と生命の響き

ルネサンスから近代への西洋美術の流れ 4月12日(土)~5月18日(日)

西洋美術の中で、心情や生命感などの目に見えないものはどのように表されてきたのでしょうか。物語画や風景画には、登場人物たちひとりひとりの性格や自然の生命の瞬一瞬の変化が、さまざまなかたちで表現されています。しかしそうした芸術作品の主題や表現は、制作された時代の様式や社会的な背景によってある程度条件づけられており、作者の主體的な表現がどこに表されているのか、見えにくくなっていることがあります。したがって、作品から響いてくるものを感じ取るためには、展覧会で歴史の流れを明らかにしておくことが必要となります。

本展は、国立西洋美術館の所蔵品の中から、通常鑑賞する機会の少ない版画を中心に、絵画・素描・彫刻合わせて126点を選び、当館の作品23点をあわせて、15世紀から20世紀初頭にいたる西洋美術の流れを再構成して紹介するものです。展示の内容は、時代区分による3部から成っています。

Der Cardinal.



ハンス・ホルバイン(子)《死の舞踏》より「枢機卿」1526年

まず第1部はルネサンス期、芸術に対する知的探求心の強まった15世紀から16世紀半ばのヨーロッパ。人体比例や透視画法などの発見は新しい現実認識と統一的世界観をもたらしました。力強い造形性をもつイタリア・ルネサンスと、デューラーを中心とする北方ルネサンスの、革新的な木版画や銅版画を展覧します。

第2部はバロック、ロココ期。17世紀のイタリアやフランスでは、光と影の変化に富むバロック様式が生まれ、自然観を主題にした風景画や人間性を表現する肖像画が好まれました。18世紀に軽快なロココ絵画に洗練されていくまでの絵画の変遷をたどります。



エドゥアール・マネ《花の中の子供》1876年

第3部は近代が舞台です。今回出品されている《花の中の子供》は、マネが印象派の影響を受けて描いたものですが、そこでは明るい緑を主調色としたのびのびとした自由な筆触によって、子供と緑が調和しています。この生命感に満ちた小景の色彩は美しいコントラストをなし、また花びらの丸い赤い点々、草の勢いのある緑の曲線などが、画面の隅々まで覆っていて、変化に富んだ楽しいリズムを生み出しています。見ていると、筆触の生命と色彩の生命が、自然の生命とびたりと一致していることが感じられてきます。19世紀のフランスでは、芸術の各ジャンルで、「何を」より「いかに」表すかという表現性が追求され、多彩な表現活動が展開されていきます。

このような展示を通して、人や自然に対する作家の情感や、描かれたものの生命感をテーマに構成した5世紀にわたる芸術作品の魅力を、感じとっていただければと思います。

(美術学芸員 平石昌子)



コルネイク・ヴァン・クレーブ《フシケとキューピッド》1700~10年頃

Welcome to Museum!

20世紀美術の冒険——セザンヌ、ファン・ゴッホから現代まで——

アムステルダム市立美術館コレクション展 [5/28(水)~7/12(土)] に寄せて

「現代美術」と私たちが呼ぶ時、どこまで遡って考えていいのでしょうか。今まさに動いている、文字通りの「同時代（コンテンポラリー）」に限定することもあれば、戦後の美術動向を大まかに総称してそう呼んだり、時にはピカソやブラックから既に現代美術の範囲に入れてしまう場合もあるかもしれません。

おそらくそれらは十人十色であり、一部の専門家以外にとっては、言葉の定義づけになど何の意味もないでしょう。ただ、折々に美術館に来てくれる、ごく一般的な鑑賞者の方々と話しをしていると、各人が口にしているそれぞれ全く異なる言葉の中にも、何か共通する法則のようなものがあるような気がしてなりません。つまり私たちが反応しているのは、自分と対象との間の距離かもしれない、ということ。言い換えれば、作品が親密に感じられなくなる瞬間を敏感にとらえ、それ以降を「現代美術」と呼んでいるのではないか、と思えることが時々あるのです。

時間的に自分が今いる現在地点に近いほど、距離の上では自分から遠くに感じられる——今世紀の美術に関しては、奇妙なことに私たちの心の中で時間と空間とがねじれているのです。他の芸術分野の事情はよく解りませんが、一般社会においては、高度な専門知識を要求する最新テクノロジーなどを別とすれば、新しいものほど判りやすいのが普通です。それなのにどうして美術の世界ではこのような逆転現象が生じてしまうのでしょうか。

実はこの現象は、19世紀の後半に既に兆候がありました。それ以前の美術はどちらかといえば新たな要素を次々と付け加えながら展開してきましたが、この頃からは、足し算ばかりではなく引き算も同時に行なわれるようになったのです。引かれることになったのは一般に、それまでの西洋美術では常識と考えられていたこと（遠



フィンセント・ファン・ゴッホ（モンマルトルの菜園）1887年

近法や主題、適切な彩色、構図 etc.) であり、それらが失われると、何か安定していた秩序が崩れるような不安な気持ちが見るものの胸に呼び起こされることになりました。

しかもそれは一度や二度ではすまず、20世紀を迎えて今日に至るまで繰り返し行なわれることになる終わりのない試みであり、何か一つ取り去られるたびに、作品を見る我々は混乱し、時には腹を立ててきたのです。それなのになぜ20世紀の美術は歯を食いしばるようになって、現行の秩序への揺さぶりを続けているのでしょうか。その問いはそのまま、現代美術とは何か、というはじめの問題に還っていきます。

いずれにしても、「自分の理解の枠を越えた瞬間から現代美術」というややネガティブな判断法は、それがどの程度まで一般的かは別としても、少し不幸に思えます。今まさに生み出されつつある作家も作品も、大半の人々にとっては理解の外に置かれたまま、一種の租界の中で、時間の経過が彼らとの距離を縮めてくれるのを待つしかなくなってしまいます。

この状況を好転させるために、私たちの方から歩み寄る方法には二つあります。まず一つ目は、理解の及ぶ範囲を広げるべく、現代美術の諸相をできる限り追いかけて、いわゆる「知」の側面からアプローチをすることで、二つ目はむしろ逆に、理解できなければ近寄れないという妙な思い込みを捨てて、とりあえず楽しんでみることで、当然のことですが、圧倒的に後者の方が難しいでしょう。わからないと言って敬遠することは簡単ですが、同じ理由で好奇心を湧きたたせるには、ちょっとした勇気が必要です。

もちろん肯定するばかりが能ではありません。否定もまた結構。とにかく来て、見て、大いに語り合ってください。全てはそこから始まるのでしょから…。



ジェフ・クーンズ《色んなものの世界》1986年

Photo credit: © the Stedelijk Museum Amsterdam

(美術学芸員 佐々木奈美子)

平成9年度の催し

企画展

新潟会場（新潟大和 7F美術特別会場）

- 4月10日(木)～4月22日(火) **ブラジルの陽光、色彩の祭典 マナブ間部展**
マナブ間部は、ブラジルに帰化した日系人で、鮮烈でかつ洗練された色彩と感受性による抽象絵画によって、現在ブラジルを代表する国際的画家として高い評価を得ています。
本展では、初期の具象作品から最近の抽象作品まで、約60点により画業の全貌を紹介します。

長岡会場（新潟県立近代美術館）

- 4月12日(土)～5月18日(日) **国立西洋美術館展 愛と生命の響き ルネサンスから近代への西洋美術の流れ**
国立西洋美術館は、昭和34年に開設された国内唯一の西洋美術を専門とする国立美術館です。本展は、その豊富な所蔵作品からデューラーやレンブラントの版画、オランダ黄金期の風景画、フラゴナールらの優雅なロココ絵画、そしてロダンに始まる近代彫刻などをルネサンス・バロック・近代の三部構成で時代別に展覧します。
- 5月28日(水)～7月12日(土) **20世紀美術の冒険—セザンヌ・ファン・ゴッホから現在まで—アムステルダム市立美術館コレクション展**
アムステルダム市立美術館は、近・現代美術のコレクションにおいて世界有数の規模と内容を誇る美術館として知られています。本展は、今世紀の主要な動向を柱に、20世紀初頭から現在までの美術の流れを、時代と表現傾向による6つの部門で構成し展覧します。
- 9月13日(土)～10月12日(日) **「1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開」展**
明治33年、新潟市で大規模な新潟絵画展覧会が開かれ、大観、春草、雅邦らの作品が展示されました。一方同年に開催されたパリ万国博覧会でも日本画が紹介されるなど、国内外で日本画が新しい道を歩み始めました。本展は、明治後期の時代性と変化する日本画の様相を、展覧会出品作を中心に紹介します。
- 11月1日(土)～12月14日(日) **—大正の美と心—中村 彝 展**
大正期を代表する洋画家中村彝は、越後柏崎の地主洲崎義郎との交流を通じて新潟とも縁が深く、彝の初めての個展も洲崎の尽力により大正9年に柏崎で開催されています。彝と洲崎をはじめとする越後の人々との交友の証というべき名作〈洲崎義郎氏の肖像〉の収蔵を機に、初個展出品作を含めた彼の代表作で構成する回顧展です。

新潟会場（新潟県民会館ギャラリー）

- 平成10年2月28日(土)～3月22日(日) **シリーズ 新潟の美術'98—現代の美術を創造する県内在住作家たち—**
今年で5回目を迎えるシリーズです。現在第一線で活躍する県内在住作家の日頃の制作活動を通して、今日の多様な美術表現を状況を紹介する展覧会です。日本画、油絵、版画、彫刻、工芸、書のそれぞれの分野から作家を選び、その作品を展示します。

常設展

〔10月13日(月)～10月16日(木)、3月26日(木)～3月31日(火)は保守点検のため、12月24日(水)～1月3日(土)は年末・年始のため休館します。〕

第1期 ■ 4月1日(火)～7月13日(日)
前期：4月1日(火)～5月18日(日)
後期：5月20日(火)～7月13日(日)

展示室1 前期：新収蔵品を中心に 後期：日本画にみる心象風景
展示室2 油絵にみる心象風景
展示室3 前期：ジャポニスムとジャポネズリⅠ
後期：ジャポニスムとジャポネズリⅡ

第2期 ■ 7月15日(火)～10月12日(日)
前期：7月15日(火)～8月31日(日)
後期：9月2日(火)～10月12日(日)

展示室1 前期：金と銀 後期：明治・大正の日本画
展示室2 絵肌(マチエール)の表現
展示室3 前期：木版画の魅力 後期：水彩画の魅力

第3期 ■ 10月17日(金)～12月23日(火)
前期：10月17日(金)～11月16日(日)
後期：11月18日(火)～12月23日(火)

展示室1 花と鳥
展示室2 人を描く
展示室3 前期：特集展示 渡辺義雄 後期：特集展示 濱谷浩

第4期 ■ 平成10年
1月4日(日)～3月25日(水)
前期：1月4日(日)～2月15日(日)
後期：2月17日(火)～3月25日(水)

展示室1 前期：土田麦僊の素描Ⅰ 後期：土田麦僊の素描Ⅱ
展示室2 特集展示 佐藤哲三
展示室3 宮芳平〈聖地巡礼シリーズ〉を中心に

野外彫刻と語らう — 屋上庭園から (2)

岡本 敦生 《地殻—海》



地面に横たわる、大地から切りだされてきたままのような四角い石。そこからはみ出しているヌメヌメとした有機的な形をした物体は、この石の内部を削り貫いて作ったものです。

この作品の素材である石は、まさにタイトル《地殻—海》の「地殻」（地球の表層近くのかたい部分）にあたります。作者岡本敦生は、地殻（石）を、進化と淘汰を繰り返してきた種々多様な生命の痕跡が堆積し記憶されたもの、として捉えています。この「地殻」である石から刻みだされた有機的な物体は、一体何に見えるのでしょうか。

この作品が作られたのと同じ1995年に、岡本はギャラリー山口に於いて《地殻—シルリアの海》というシリーズを発表しています。シルリア紀（シルル紀）は、地質時代の中生代の中期にあたる今から4億年以上も前で、地球上で脊椎動物の原型が生まれた時期です。岡本は、生命の進化の歴史が蓄積されているはずの自分の遺伝子の記憶をたどりつつ、古代の海に発生した生命の原形を、「地殻」の中から掘り起こすことを試みたのです。

表紙作品解説 チェスワフ・ズベール 《V. I. P.》

ズベールの作品は、精度の高い光学ガラスをハンマーを使って砕き、サンドブラスト（砂を吹き付けて削る方法）によって自由に形を彫りつけ、そこに油彩を施して作ります。

ハンマーに加えた力が作り出す形のダイナミズムはもとより、そこに表れてくるのは、透明さ、割れ目に見える独特の文様、透けて見える色彩の響き合いといった、ガラスとい

う素材の持つ特徴で、彼はこれを最大限に生かしているといえます。加えて、サンドブラストによって彫り込まれた様々な形は実にユーモラスで、施された原色の色彩はにぎやかで楽しげです。

このようなガラスの美しさと作者の人間的な明るいユーモアや美的感覚との融合が親しみやすさの秘密といえるでしょう。



1993年 光学ガラス、油彩 63×31×22cm

美術館友の会からのお知らせ

◎会員募集

新潟県立近代美術館友の会では、平成9年度の会員を募集中です。友の会は美術を愛する人が集まり、鑑賞会や研修会、会報発行などの活動を通じて親睦を深め、美術館を支援する団体です。有効期間は平成9年4月1日から翌年3月31日までです。常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引、会報等の配布や研修旅行への参加などの特典があります。

照会や入会のお申し込みは、新潟県立近代美術館友の会事務局にお問い合わせください。

【問い合わせ TEL.0258-28-4111】

◎催し

国立西洋美術館展 愛と生命の響き

4月12日(土)～5月18日(日)

開会式：4月11日(金)

友の会鑑賞会：5月3日(土) 14:00～

マナブ間部展 4月10日(木)～4月22日(火)

会場：新潟大和7F美術特別会場

※友の会の企画展無料観覧券がご使用になれます。

友の会鑑賞会：4月19日(土) 14:00～

20世紀美術の冒険 アムステルダム市

立美術館展 5月28日(木)～7月12日(土)

開会式：5月27日(火)

友の会鑑賞会：6月1日(日) 10:00～

利用案内

■開館時間／午前9時～午後5時

■休館日／毎週月曜日

ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。

※10月13日(月)～10月16日(木)、

12月24日(水)～平成10年1月3日(土)、

平成10年3月26日(水)～3月31日(火)

は保守点検のため休館します。

■観覧料金／企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

大学・高校生……200円(160円)

中学・小学生……100円(80円)

※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮岡町字居掛278-14 〒940-21

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

美術連話(8) 「逆さになった世界」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

昨年秋の暮れ方にそれまで26年間住んだ東京を出て浦和市へ引っ越した。それもマンションから一戸建てへと移ったので、次第に冬に向かうにつれて室温の調整に苦勞した。いま思うと老年の身には大きな冒険であった。書物の移転に人が付いていったという感じの強い引っ越しであったから館員の方々にも色々ご配慮を頂いた。本当に有り難いことであった。書物はおよそ前の住いの通りに取まって普段使うことの多い辞書類など、長年の習慣通りに身体で覚えた場所に置いてある。

わたしが自分で一戸を構えるようになってから七回目の引っ越しで、年月とともに荷物の数も増え、今度はそれをどうして減量するかが何よりの問題であった。整理をしているとすっかり忘れて了っていたものが出てくる。新村出先生が署名をして下さった『イソップ物語』と『童心録』はともに昭和23年に頂いたもので、殊に前者は私の大学での恩師の児島喜久雄先生が挿絵を描き装幀をもなさった美しい本である。時世が悪かったので用紙も粗末で随分と赤茶けて了ってはいるが、改めて読みなおして懐旧の情殊更なものがあった。両書とも新村先生70歳ころの御本で、児島先生は60歳くらいか。今の私からみるとお二人ともまだまだお若い頃の著作ということになる。このような感じを私は「逆さになった世界」と名付けているのだが、齢をとるとともにこの種の倒錯感の数は増してくる。

数年前エルミタージュ展の準備のためにサンクト・ペテルブルク滞在中、その本屋でハイネの詩集を買って、「逆さになった世界」という短詩を見出し興を覚えたことがある。それはボッシュやブリューゲルの絵の底流をなす基本主題の一つとして、若い妻が老いた夫に頭からマントを被せたり(牝鶏曉を告ぐ)、兎が人を狩るなどのモチーフで端的に表現されている。この思想と私の言う倒錯感とは大分ズレがあるが、永い間畏敬の念を懐いて仰ぎ見て来た先生方が、いつの間にか私よりも若い人になって了ったという感じはこれまた一つの「逆さになった世界」ではあるまいか。

ガラクタの中からデューラー一枚、レンブラント二枚、計三点の小さな版画が出て来た。何れもドイツの友人たちから貰ったもので刷りは決して良いとは言えないが、彼らの友情は銘記に値する。デューラーは《半月の聖母》(B.33)、またレンブラントは《小さなユダヤ女》(H.154)と《あずまの男》(H.194)で、愛妻サスキアをモデルにしたユダヤ女は日本紙に刷っている。デューラーの聖母を真中にして左にユダヤ女、右にあずまの男を置き、一枚のマットにマウントして机上におけば、素敵な聖母小祭壇になるかも知れないと思うと急に嬉しくなった。思い立ったが吉日で、今度こそそれないようにしよう。

四月の国立西洋美術館展の版画の部にはデューラーもレンブラントも刷りの良い名品が出る。その殆どが私の在任中に購入したもので、それぞれに思い出がある。特にレンブラントの百グルデン版をよく見て欲しい。神品とはこういう作品を言うのである。しかも17世紀の半ば近くに日本からオランダへ輸出された雁皮紙に刷っている。まさに版画のミュージアムピースであるが、余り展示はして欲しくないという気持もあって些か複雑である。何しろ350年ほど前の紙である。我が国が鎖国という名の巧妙な管理貿易体制に入ってもなくの頃に遠く欧州へもたらされた紙が里帰りしたわけで、浮世絵版画はまだ生れていない時代に西洋で珍重されたのである。奇なるかな。



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン

《聾人たちに語るキリスト(百グルデン版)》1649年頃